

日本語教育での教授法について ④

講義形式の授業で

2018年8月に天理大学より依頼があり、9月下旬から始まる日本語教員養成課程の「日本語教育入門」を担当した。急な依頼ではあったが、日本語教員養成に関しては普段から天理教青年会・婦人会海外人材派遣生の授業を行い、また日仏文化協会日本語教師養成講座の講師を担当したこともあり、「日本語教育入門」のシラバスも見て、充分に対応できるだろうと判断して引き受けることにした。またこの課程を修了した卒業生が筆者の勤める学校に来ることもあるので、何かとメリットもある。ただ登録者が56人いるとのことで、これほどの人数を相手にした授業は初めてでもあり、どのように進めようかと悩んだ。前回で「講義形式の授業」と「インタラクティブな授業」について書いたが、教員養成の授業で、大人数でもあり、この授業は講義形式の授業とならざるを得なかった。だが果たして、それで自分が伝えたいことが学生に伝わるのだろうかという思いもあった。

動機は何であれ

まず、初日の授業で教室へ行ってみて、やはり学生が多いという印象だった。後ろの出口付近に座っておしゃべりしている女子学生グループ、教卓の前に陣取っている留学生たち、どんな授業が始まるのだろうと筆者の顔を見ている学生。そんな中、Power Pointで作ったファイルをスクリーンに映し出し、ペンマイクを付け、自己紹介から始めたが、相変わらず私語も多く、前に陣取っている留学生たちは時々、後ろを振り返り、迷惑そうな顔をしていた。大学の授業というのはこんなものだろうか。大学全入時代と言われて久しいが、いろいろな学生がいるものだと感じた。普段、留学生の日本語クラスでも、青年会海外人材派遣生の研修クラスでも20人を超えることはないのに、ちょっと勝手が違った。卒業後に日本語教育の道へ進みたいと思い、受講している学生もいれば、副専攻で何となく日本語教育に興味を持ち登録した学生もいることと思う。あるいは先輩から勧められ登録したという学生もいるだろう。学習動機が何であれ、とにかく興味を持って履修登録してこの教室に来てくれたことに謝辞を伝え、この授業の概要についても述べた。

ノートは取らなくていい

「この授業では一切、ノートを取らないでください。」これには一瞬、驚いた学生もいたようだが、授業が終わった後でレジュメを渡すので、授業中は筆者の問いかけについてよく考え、そして、わからなければ隣の人と話してもかまわないから、ひたすら頭を使ってくれと指示した。そして「あとでマイクを持って皆さんのところを回りますから」と付け加えた。一般的に講義形式の授業では教卓のところに教員がいて「私語をやめなさい」「静かにしなさい」「しっかりノートを取りなさい、試験に出しますよ」となるのであろうが、逆のことばかりしているのだから、戸惑う学生がいたかもしれない。

しかし、「学ぶ」ということは“受身でやる”ものではないので、このクラスでは無理にでも主体的に参加できる環境を作ることの方が大事に思えた。日本語教育の専門用語や解説など

はあとで渡すレジュメを見て覚えればよい。まずは頭をフル回転させながら、興味を持って日本語教育というものに触れてほしかった。きっかけは何であれ、この授業に興味を持ち、日本語教育の世界のことを知りたいと思ったのであろうから、それに応えるのが教師の使命かとも思う。「留学生に対する日本語教育の授業」も、また「日本語教育に携わろうとする教員養成の授業」も、学習者が何かを「学ぶ」という点では変わらない。自分が「教育心理学」や「教授・学習過程論」で研究してきたことを活かして実践する場でもあると思った。

クイズ番組の司会者のよう?

授業はすべてスクリーンに映し出し、Power Pointで図や画像もテキストもクリックする度に順次表示されるように設定し、だいたい5～10分おきに考えて答えるクイズ形式のテキストも入れておいた。話が抽象的になるので、具体的にを行った例を出すことにする。初日の「日本語教育と国語教育の違い」のところで、両者の共通点や相違点は何かと画面を見せてから、全員に問いかけた。「5分あげるから考えてみてください。一人で考えて答えが出なかつたら、隣の人と相談してもいいですよ。」そう伝えてから教卓を離れ、教室の中を歩き回り、時々、「目的や学習者や教材の面で違いはどうですか?」というようにヒントを出した。「はい、5分たちました。じゃあ、どうですか?」と、マイクを一人の学生に向けて、考えたことを答えてくれる。答えに躊躇している場合には「隣の人と相談したでしょう?間違っても連帯責任だから……」と“笑顔”で促すと、それなりに答えてくれる。教師が話している時に私語が止まらない学生もなぜか、他の学生が答える時には静かになる。「じゃあ、次の人、どうですか?」というようにランダムにマイクを向けながら、だいたい意見が出たところで教卓に戻り、Power Pointの画面を切り替えて、共通点や相違点について解説を行う。

自分たちが考えた答えと同じだと喜ぶ学生、他の学生の答えを聞いて、なるほどという顔をしている学生、反応は様々だが、自分の頭で考えた分、答えがどうなるのか知りたくて、「静かにしてください」と言わなくても興味を持って聞いてくれる。おしゃべりばかりしているグループにも「どうですか? 考えてくれましたか?」とマイクを向けると、それなりに考えたことを言ってくれる。

その後、同じ要領で母語や公用語の話、歴史的な話、国内で行われている第二言語としての日本語教育 (Japanese as a Second Language)、海外で行われている外国語としての日本語教育 (Japanese as a Foreign Language) の話につなげ、初日の授業を終えた。クイズ番組の司会者のようだと思うかもしれないが、考えることによって眠くならない、マイクを向けられるから適度な緊張感も生まれる。自分で考えてわからなければ友達と相談して答えを導くということで頭を使ったが、心地よい疲労感があり、勉強になったと言ってももらえれば成功だと筆者は考えている。毎回、授業後に出席カードに感想と授業内容について質問を書かせていたが、様々な感想や質問が出た。学生たちが授業を聞きながら考えてくれていたことは、次の授業への活力になったものである。